

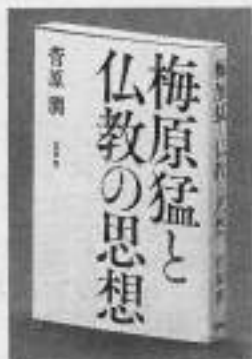
梅原猛と仏教の思想

菅原 潤／著

大いなる思想家の輪郭

揮する『思想家』と位置付ける。

若き梅原の関心は、「感情」に向けられた。特に注視したのが「笑い」についてで、彼は仕



(法蔵館・1980年)

すがわら・じゅん 1963年仙台市生まれ、日本大学教授。著書に「井証法とイロニミー」「京都学派」など

事の合間を縫って大阪の劇場に通った。ここから彼はエリートが遠ざけた快楽や性愛に対して肯定的態度をとるようになる。

この姿勢は仏教研究に反映された。エリートは内省的な親鸞や道元に好意的で、官能性が際立つ密教に否定的だった。梅原は知識人が距離をとってきた空海や日蓮を大胆に評価し、その生命観を現世肯定の論理として礼賛した。

しかし、その梅原が最後までこだわったのが親鸞だった。近代人は、親鸞の中心概念を「悪

人正機」と捉え、そこに自己反省的な契機を読み取ろうとする。しかし、梅原は親鸞の核心を「二種回向」に求める。

浄土真宗では、浄土に往生することを「往相」と言い、仏となつて再びこの世に帰って来ることを「還相」という。この「往相」と「還相」をセットとして理解するのが「二種回向」である。梅原の不満は、浄土を信じることができなくなった現代人に向けられる。現代人は、「往相」も「還相」も迷信と捉えるため、親鸞の本質を見誤っているというのだ。

梅原が亡くなって3年半。ようやく梅原思想の輪郭が見えてきた気がする。

(中島岳志・東京工業大学教授)

法蔵館・1980円

菅原潤著

梅原猛と仏教の思想

古代史ファンだった私は、中学生のころ梅原猛の本に夢中だった。法隆寺は聖徳太子の怨霊を鎮魂するために再建されたとする「隠された十字架」や柿本人麻呂が流刑死したとする「水底の歌」を、まるで推理小説を楽しむように読んだ。梅原の講演会にも足を運んだ。

大学生になり、研究論文に目を通すようになると、梅原の説に、多くの研究者が疑問を投げかけていることを知った。中にはまともな学説として扱う内容ではないと切って捨てる研究者もいた。しかし、私の梅原への敬意は変わらなかった。それは、私が梅原を思想家と見ていたことによる。本書も梅原を「大いなる批評性を発揮する『思想家』」と位置付ける。

若き梅原の関心は、「感情」に向けられた。特に注視したのが「笑い」についてで、彼は仕事の合間を縫って大阪の劇場に通った。ここから彼は

親鸞ら研究 論理の輪郭

エリートが遠ざけた快楽や性愛に対して肯定的態度をとるようになる。

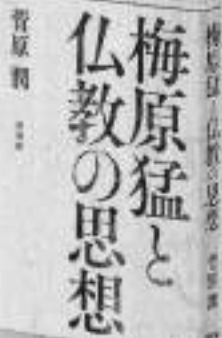
この姿勢は仏教研究に反映された。エリートは内省的な親鸞や道元に好意的で、官能性が際立つ密教に否定的だった。梅原は知識人が距離をとってきた空海や日蓮を大胆に評価し、その生命観を現世肯定の論理として礼賛した。

しかし、その梅原が最後までこだわったのが親鸞だった。近代人は、親鸞の中心概念を「悪人正機」と捉え、そこに自己反省的な契機を読み取ろうとする。しかし、梅原は親鸞の核心を「二種回向」に求める。

浄土真宗では、浄土に往生することを「往相」と言い、仏となって再びこの世に帰って来ることを「還相」という。この「往相」と「還相」をセットとして理解するのが「二種回向」である。梅原の不満は、浄土を信じることでできなくなった現代人に向けられる。現代人は、「往相」も「還相」も迷信と捉えるため、親鸞の本質を冒涇しているというのだ。

梅原が亡くなって3年半。ようやく梅原思想の輪郭が見えてきた気がする。

(中島岳志・東京工業大学教授)



菅原潤

評・中島 岳志＝東京工業大教授

梅原猛と仏教の思想

古代史ファンだった私は、中学生のころ梅原猛の本に夢中だった。法隆寺は聖徳太子の怨霊を鎮魂するために再建されたとする「隠された十字架」や柿本人麻呂が流刑死したとする「水底（みなそこ）の歌」を、まるで推理小説を築くように読んで、梅原の講演会にも足を運んだ。

大学生になり、研究論文に目を通すようになると、梅原の説に、多くの研究者が疑問を投げかけていることを知った。中にはまともな学説として扱う内容ではないと切って捨てる研究者もいた。しかし、私の梅原への

「二種回向」で親鸞読み解く

敬意は変わらなかった。それは、私が梅原を思想家と見ていたことによる。本書も梅原を「大いなる批評性を発揮する『思想家』」と位置付ける。

若き梅原の関心は、「感情」に向けられた。特に注視したのが「笑い」についてで、彼は仕事の合間を縫って大阪の劇場に

梅原猛と 仏教の思想

菅原 潤

梅原猛と仏教の思想

通った。ここから彼はエリートが遠ざけた快楽や性愛に対して肯定的態度をとるようになる。この姿勢は仏教研究に反映された。エリートは内省的な親鸞や道元に好意的で、官能性が際立つ密教に否定的だった。梅原は知識人が距離をとってきた空海や日蓮を大胆に評価し、その生命観を現世肯定の論理として礼賛した。

しかし、その梅原が最後までこだわったのが親鸞だった。近代人は、親鸞の中心概念を「悪人正機」と捉え、そこに自「反省的な契機を読み取る」とする。しかし、梅原は親鸞の核心を「二種回向」に求める。

浄土真宗では、浄土に往生することを「往相（おうそう）」と言い、仏となって再びこの世に帰って来ることを「還相（げんそう）」という。この「往相」と「還相」をセットとして理解するのが「二種回向」である。梅原の不満は、浄土を信じる「とがでなくなつた現代人に向けられる。現代人は、「往相」も「還相」も迷信と捉えるため、親鸞の本質を見誤っているというのだ。

梅原が亡くなって3年半。ようやく梅原思想の輪郭が見えてきた気がする。

■ 梅原猛と仏教の思想 ■

菅原 潤〔著〕

古代史ファンだった私は、中学生のころ梅原猛の本に夢中だった。法隆寺は聖徳太子の怨霊を鎮魂するために再建されたとする「隠された十字架」や柿本人麻呂が流刑死したとする「水底の歌」を、まるで推理小説を楽しむように読んだ。梅原の講演会にも足を運んだ。

大学生になり、研究論文に目を通すようになると、梅原の説に、多くの研究者が疑問を投げかけていることを知った。中にはまともな学説として扱う内容ではないと切つて捨てる研究者もいた。しかし、私の梅原への敬意は変わらなかつた。それは、私が梅原を思想家と見ていたことによる。本書も梅原を「大いなる批評性を発揮する『思想家』」と位置付ける。

若き梅原の関心は、「感情」に向けられた。特に注視したのが「笑い」についてで、彼は仕事の合間を縫って大阪の劇場に通った。ここから彼はエリー

大いなる思想家の輪郭

トが選んだ快楽や性愛に対して肯定的態度をとるようになる。

この姿勢は仏教研究に反映された。エリートは内省的な親鸞や道元に好意的で、官能性が際立つ密教に否定的だった。梅原は知識人が距離をとってきた空海や日蓮を大胆に評価し、その生命観を現世肯定の論理として礼賛した。

しかし、その梅原が最後までこだわったのが親鸞だった。近代人は、親鸞の中心概念を「悪人正機」と捉え、そこに自己反省的な契機を読み取るようになる。しかし、梅原は親鸞の核心を「二種回向」に求める。

浄土真宗では、浄土に往生することを「往相」と言い、仏となって再びこの世に帰って来ることを「還相」という。この「往相」と「還相」をセットとして理解するのが「二種回向」である。梅原の不満は、浄土を信じていることができなくなった現代人に向けられる。現代人は、「往相」も「還相」も迷信と捉えるため、親鸞の本質を見誤っているというのだ。

梅原が亡くなって3年半。ようやく梅原思想の輪郭が見えてきた気がする。



法蔵館・1980円

梅原猛と 仏教の思想

菅原潤

評
中島岳志
(東京工業大学教授)

古代史ファンだった私は、中学生のころ梅原猛の本に夢中だった。法隆寺は聖徳太子の怨靈を鎮魂するために再建されたとする「隠された十字架」や柿本人麻呂が流刑死したとする「水底の歌」を、まるで推理小説を楽しむように読んだ。梅原の講演会にも足を運んだ。

大学生になり、研究論文に目を通すようになると、梅原の説に、多くの研究者が疑問を投げかけていることを知った。中にはまともな学説として扱う内容ではないと切っ掛けで捨てる研究者もいた。

しかし、私の梅原への敬意は変わらなかった。それは、私が梅原を思想家と見ていたことによる。本書も梅原を「大いなる批評性を発揮する『思想家』」と位置付ける。

若き梅原の関心は、「感情」に向けられた。特に注

大いなる思想家の輪郭

視したのが「笑い」についてで、彼は仕事の合間を縫って大阪の劇場に通った。ここから彼はエリートが遠ざけた快楽や性愛に対して肯定的態度をとるようになる。

この姿勢は仏教研究に反映された。エリートは内省的な親鸞や道元に好意的で、官能性が際立つ密教に否定的だった。梅原は知識人が距離をとってきた空海や日蓮を大胆に評価し、その生命観を現世肯定の論理として礼賛した。

しかし、その梅原が最後までこだわったのが親鸞だった。近代人は、親鸞の中心概念を「悪人正機」と捉え、そこに自己反省的な契機を読み取ろうとする。しかし、梅原は親鸞の核心を「二種回向」に求める。

浄土真宗では、浄土に往生することを「往相」と言い、仏となって再びこの世に帰って来ることを「還相」という。「の往相」と「還相」をセットとして理解するのが「二種回向」である。梅原の不満は、浄土を信じていることができなくなった現代人に向けられる。現代人は、「往相」も「還相」も迷信と捉えるため、親鸞の本質を見誤っているのだ。

梅原が「へ」になって3年半。ようやく梅原思想の輪郭が見えてきた気がする。

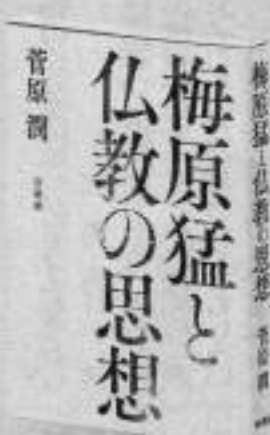
(法蔵館・1980円)

梅原猛と仏教の思想

菅原潤著

梅原猛と仏教の思想

(菅原潤著)



古代史ファンだった私は、中学生のころ梅原猛の本に夢中だった。法隆寺は聖徳太子の怨霊を鎮魂するために再建されたとする「隠された十字架」や柿本人麻呂が流刑死したとする「水底の歌」を、まるで推理小説を楽しむように読んだ。梅原の講演会にも足を運んだ。

大学生になり、研究論文に目を通すようになると、梅原の説に、多くの研究者が疑問を投げかけていることを知った。中にはまともな学説として扱う内容ではないと切つて捨てる研究者もいた。しかし、私の梅原への敬意は変わらなかつた。それは、私が梅原を思想家と見ていたことによる。本書も梅原を「大いなる批評性を発揮する『思想家』」と位置付ける。

若き梅原の関心は、「感情」に向けられた。特に注視したのが「笑い」についてで、彼は仕事の合間を縫って大阪の劇場に通った。ここから彼はエリートが適さけた快楽や性愛に対して肯定的態度をとるようになる。

「二種回向」に親鸞の核心

この姿勢は仏教研究に反映された。エリートは内省的な親鸞や道元に好意的で、官能性が際立つ密教に否定的だった。梅原は知識人が距離をとってきた空海や日蓮を大胆に評価し、その生命観を現世肯定の論理として礼賛した。

しかし、その梅原が最後までこだわったのが親鸞だった。近代人は、親鸞の中心概念を「悪人正機」と捉え、そこに自己反省的な契機を読み取ろうとする。しかし、梅原は親鸞の核心を「二種回向」に求める。

浄土真宗では、浄土に往生することを「往相」と言い、仏となって再びこの世に帰って来ることを「還相」という。この「往相」と「還相」をセットとして理解するのが「二種回向」である。梅原の不満は、浄土を信じるのができなくなった現代人に向けられる。現代人は、「往相」も「還相」も迷信と捉えるため、親鸞の本質を見誤っているというのだ。

梅原が亡くなって3年半。ようやく梅原思想の輪郭が見えてきた気がする。

(中島岳志・東京工業大学教授)
 (法蔵館・10800円)

すがわら・じゅん 1963年仙台市生まれ、日本大教授。著書に「弁証法とイロニー」「京都学派」など。

大いなる思想家の輪郭

古代史ファンだった私は中学生のころ梅原猛の本に夢中だった。法隆寺は聖徳太子の怨霊を鎮魂するために再建されたとする「隠された十字架」や柿本人麩呂が流刑死したとする「水底の歌」を、まるで推理小説を羨しむように読んだ。梅原の講演会にも足を運んだ。

大学生になり、研究論文に目を通すようになると、

梅原の説に、多くの研究者が疑問を投げかけていることを知った。中にはまともな学説として扱う内容ではないと切っ掛けで捨てる研究者もいた。しかし、私の梅原への敬意は変わらなかつた。それは、私が梅原を思想家と見ていたことによる。本書も梅原を「大いなる批評性を発揮する『思想家』」と位置付ける。

若き梅原の関心は、「感情」に向けられた。特に注視したのが「笑い」についてで、彼は仕事の合間を縫って大阪の劇場に通った。

ここから彼はエリートが遠ざけた快楽や性愛に対して肯定的態度をとるようになる。この姿勢は仏教研究に反映された。エリートは内省的な親鸞や道元に好意的で、官能性が際立つ密教に否定的だった。梅原は知識人が距離をとってきた空海や日蓮を大胆に評価し、その生命観を現世肯定の論理として礼賛した。

しかし、その梅原が最後までこだわったのが親鸞だった。近代人は、親鸞の中心概念を「悪人正機」と捉え、そこに自己反省的な契機を読み取ろうとする。しかし、梅原は親鸞の核心を「二種回向」に求める。

浄土真宗では、浄土に往生することと「往相」と言い、仏となって再びこの世に帰って来ることを「還相」という。この「往相」と「還相」をセットとして理解するのが「二種回向」である。

梅原の不満は、浄土を信じていることができなくなった現代人に向けられる。現代人は、「往相」も「還相」も迷信と捉えるため、親鸞の本質を見誤っているというのだ。梅原が亡くなって3年半。ようやく梅原思想の輪郭が見えてきた気がする。

（東京工業大教授・中島岳志）

■梅原猛と仏教の思想

菅原 潤 著 ●法蔵館/1980円



梅原猛と仏教の思想

菅原 潤著

古代史ファンだった私は、中学生のころ梅原猛の本に夢中だった。法隆寺は聖徳太子の怨霊を鎮魂するために再建されたとする「隔された十字架」や柿本人麻呂が流刑死したとする「水底の歌」を、まるで推理小説を染しむように読んだ。梅原の講演会にも足を運んだ。

大学生になり、研究論文に目を通すようになると、梅原の説に、多くの研究者が疑問を投げかけていることを知った。中にはまともな学説として扱う内容ではないと切って捨てる研究者もいた。しかし、私の梅原への敬意は変わらなかった。それは、私が梅原を思想家と見ていたことによる。本書も梅原を「大いなる批評性を発揮する『思想家』」と位置付ける。

若き梅原の関心は、「感情」に向けられた。特に注視したのが「笑い」についてで、彼は仕事の合間



法蔵館
1980円

大いなる思想家の輪郭

を縫って大阪の劇場に通った。ここから彼はエリートが遠ざけた快樂や性愛に対して肯定的態度をとるようになる。

この姿勢は仏教研究に反映された。エリートは内省的な親鸞や道元に好意的で、官能性が際立つ密教に否定的だった。梅原は知識人が距離をとってきた空海や日蓮を大胆に評価し、その生命観を現世肯定の論理として礼賛した。

しかし、その梅原が最後までこだわったのが親鸞だった。近代人は、親鸞の中心概念を「悪人正機」と捉え、そこに自己反省的な契機を読み取ろうとする。しかし、梅原は親鸞の核心を「二種回向」に求める。

浄土真宗では、浄土に往生することを「往相」と言い、仏となった後再びこの世に帰って来ることを「還相」という。この「往相」と「還相」をセットとして理解するのが「二種回向」である。梅原の不満は、浄土を信じることができなくなった現代人に向けられる。現代人は、「往相」も「還相」も迷信と捉えるため、親鸞の本質を見誤っているというのだ。

梅原が亡くなって3年半。ようやく梅原思想の輪郭が見えてきた気がする。

(中島岳志・東京工業大学教授)

「梅原猛と仏教の思想」

菅原潤著

古代史ファンだった私は、中学生のころ梅原猛の本に夢中だった。法隆寺は聖徳太子の怨霊を鎮魂するために再建されたとする「隠された十字架」や柿本人麻呂が流刑死したとする「水底の歌」を、まるで推理小説を楽しむように読んだ。梅原の講演会にも足を運んだ。

大学生になり、研究論文に目を通すようになると、梅原の説に、多くの研究者が疑問を投げかけていることを知った。中にはまともな学説として扱う内容ではないと切っ捨てて研究者もいた。しかし、私の梅原への敬意は変わらなかった。それは、私が梅原を思想家と見ていたことによる。本書も梅原を「大いなる批評性を発揮する『思想家』」と位置付ける。

若き梅原の関心は、「感情」に向けられた。特に注視したのが「笑い」についてで、彼は仕事の合間を縫って大阪の劇場に通った。ここから彼はエリートが遠ざけた快楽や性愛に対して肯定的態度をとるようになる。

この姿勢は仏教研究に反映された。エリートは内省的な親鸞や道元に好意的で、官能性が際立つ密教に否定的だった。梅原は知識人が距離をとってきた空海や日蓮を大胆に評価し、その生命観を現世肯定の論理

「大いなる思想家」の輪郭

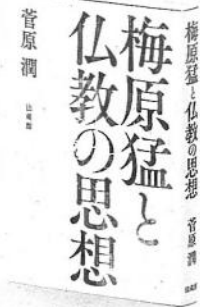
として礼賛した。

しかし、その梅原が最後までこだわったのが親鸞だった。近代人は、親鸞の中心概念を「悪人正機」と捉え、そこに自己反省的な契機を読み取ろうとする。しかし、梅原は親鸞の核心を「二種回向」に求める。

浄土真宗では、浄土に往生することを「往相」と言い、仏となって再びこの世に帰って来ることを「還相」という。この「往相」と「還相」をセットとして理解するのが「二種回向」である。梅原の不満は、浄土を信じていることができなくなった現代人に向けられる。現代人は、「往相」も「還相」も迷信と捉えるため、親鸞の本質を見誤っているというのだ。梅原が亡くなって3年半。ようやく梅原思想の輪郭が見えてきた気がする。

評・中島岳志（東京工業大学教授）

法蔵館・16800円



◇すがわら・じゅん 1963年仙台生まれ、日本大教授。著書に「弁証法とイロニー」「京都学派」など。